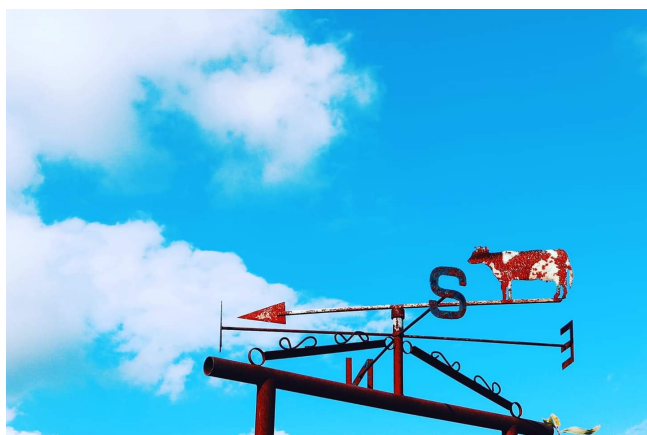




原田牧場 Note

page10

農家のお金事情、給与編。昔は収入が多くなかったので、台所を任されている母さんが家計費を預かりその中からお小遣い程度をお嫁さんがもらっていたところが多かったようです。里帰りする時は飛行機代をもらいお土産をもたされて帰る、ひと昔前の光景に思いますが、今も個々の台所事情により、変わっていない家もあるかもです。

牛の頭数が増えてからは専従者給与が一般的になり、我が家も夫（個人事業主）以外はお給料制です。大阪の友人からは「家の仕事ってお給料じゃないんでしょ。働いた分もらえてないのでは？」と心配されましたが、働いた分をきっちりもらっています。保険や携帯代、帰省の交通費も自分で支払っているし、車も自分で購入。大阪時代とほぼ同じ様にやりくりしています。ショッピングやグルメ、習い事や旅行に使っていたお金は、田舎では使うところがなく貯まる一方で嬉しいような悲しいような。給料日のワクワクは昔ほどないですが、頑張った毎日を、ひと月に一回振り返る給料日に変わりはありません。生き物商売は気がかりの連続で気を抜けることはないので、今月も無事おさまったなと一瞬の区切りとしています。昔と違うのは、お給料の金額を見る時に牛さんのことを思います。現在、1キロ100円前後で取引されている生乳何キロ分に当たるなあ。（何かを買う時、この生乳価格を物差しにする酪農家あるある） 命に感謝する気持ち、経営（牛の体調）が安定するように意識もでき、また緊張感ある毎日に繋がります。

ニュースになっているとおり、酪農家にはまだまだ苦しい状況が続きそうです。コロナで乳製品の需要落ち込み、戦争で餌や飼料や燃料が高騰、国と乳業メーカーが決めた生産目標を大きく上回る増産で（大規模化経営する農家に助成金を出して推進したのも国だからね！）余剰が発生し、生産抑制を強いられているのに、海外の乳製品の輸入は進めている... 個人では状況を良く出来る手立てが無く、お給料が出ない日も来るかもしれません。 が、とにかく節約とこれまでの蓄えでやりくりして、牛さんにはちゃんと食べさせたいと思います。

それぞれの農家の台所事情によりけり、と書きましたが、嫁ぐ前にその事情を知るのは難しく、来てみてびっくり！が普通にあります。いつでも助け合える家族経営の良さはわかってはいるものの、仕事が片寄っている気がする、お金のことはどうも言いづらい、よその経営を知らないので、我が家ルールが時代に合っているのか？判断しづらい、という場合に家族経営協定があります。

関係機関の第三者が立ち合って、将来の目標、役割分担、就業条件を家族全員で話し合う機会です。特に、お嫁さんが家族に加わった時や、後継者が学校を卒業して家業に戻ってきた時、うちの現状を確認すると同時に、今まで以上に意欲ややりがいを持てる形態をみんなで考えることができます。昔は父さん一人がやっていた経営に、全員が参画することが大事です。家族のチームワークが整えられ最大限に発揮されれば怖いもの無し、家業がとてつもなく魅力的に感じられてくるでしょう。

誰も知り合いのいない土地で、家族だけの仕事で、なんか怖いな、感じた記憶が私にもあります。時が止まったルール、しょうがないと口癖のように言うだけ。閉ざされた空間の中で自分だけが違和感を感じていた時、こんな制度があるよ、と関係機関が説明に来てくれ、外部と繋がる窓があった！と安堵しました。 協定を文章化したり調印式までやらずとも、家族内で話のきっかけになればいいのです。

さて、牧場の父さん母さんが若い時代はどのような賃金制だったのか？ 聞いてみました。家業は仕事というより生活だったのでお駄賃程度だったよ、空いている時間に林業の手伝いに行ったり、さけます孵化場の卵の選別に行ったりしてお金を貯めて、欲しかった腕時計を買ったよ。親父は外で働くのは嫌がったけどね、とのこと。生きていくのにやっとの生活の中でも自分の力で手に入れた欲しいもの。どんなに嬉しかったか想像しながら話に聞き入ってしまいました。

ちなみに、わが家の搾乳アルバイトは時間給1200円（朝5時～と夕方16時～それぞれ2時間半ずつ）。昼間は別の仕事をするダブルワーク可能。私も昼間は地域のローカルデザインの作業をしていたりします。JA北海道ではパラレルノーカーと呼んで推進中。興味のある方はぜひどうぞ。



筆者 原田 希 ハラダノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住 自身も酪農家に

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに、
新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当